

# 土

# 淨

號併合月一・月二十

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月二回一日發行）  
昭和十八年十二月廿日印刷納本・昭和十九年一月一日發行

第十卷 第一號



安西覺 承著

# 法然上人の和歌

B6版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺徳の結晶をみる。

増谷文雄 著

# 行誠上人

B6版二百三十頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館  
振替東京八二一八七番

林 靈 法 著

# 法然上人を憶ふ

B6版四四〇頁 實費三圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通じ、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつつた。

本會で取次ぎます

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢増○

淨土 十二・一月號 目次

表紙・巻頭カッパ……………中島保

一誠以て決戦へ……………里見達雄(一)

聖典 大東亞を融かす心……………大野法道(八)

内面的生活を求む……………吉田絃二郎(二)

大詔 あの日感激……………伊藤宏天(一九)

奉獻 報國隊 新人炭坑を見る……………島野禎祥(四)

決戦の春……………岡本一平(二〇)

無名の英靈……………佐藤賢順(四)

敵米國より歸りて 教團に要む……………窪川旭丈(四)

手帖……………子母澤寛(六)

信仰相談……………(三)

童話 釋尊と水差し屋……………坪上勳夫(七)

歌壇……………岩野喜久代選(三)

俳壇……………太田耳動子選(六)

宗教 宗徒 とんちん物語……………糸山天真(六)

隨筆 實話 身代り地藏物語……………石橋徳作(六)

法語 廻願と二河白道……………中村辨康(三)

編輯後記……………(三)

## 淨土

第十卷  
第一號

法然上人御法語

往生は世にやすけれど  
みな人の誠の心なくて  
こそせね

## 一誠以て決戦へ

會長 里見達雄

聖戰第四年の新春を迎へ謹んで

聖壽萬歳を壽ぎ奉り、前線將兵の武運長久を祈念いたします。

今や各方面とも決戦配置を終へ、ただ不言實行によつて頑敵殲滅に突進するばかりであります。敵は甚大な損害を蒙りつゝも次々に必死に反抗し來つて居ります。この敵の攻勢には侮り得ないものがあります。前線將兵の善戰奮闘にこたへて、われわれも亦職域に御奉公の誠を致さねばなりません。

申すまでも無く國民の緊張と、あらゆる困難を克服して、最後まで勝ち抜かんとする覺悟はまことに強固であります。この姿をみて皇國民の偉大さ、一億の底力を感ずるのでありますが、しかし決してこれで満足するものではありません。

東條首相の御言葉に「濟世無奇策、一誠排萬難」を座右の銘としてゐるとあります。まことに敵撃滅に奇策のあらう筈もなく、一つの誠こそあれば萬難恐るゝに足りません。如何なる苦難に遭遇するも、決してこれを回避せず進んでこれを克服してゆけるのも一つの誠あればこそであります。誠は信念です。

總裁陛下は「淨土宗徒タル者、死生共ニワヅラヒナキノ祖訓ヲ體シ、必勝ノ信念ヲ堅持シテ戰時生活ニ徹底シ、身ヲ挺シテ奉公ノ實ヲ擧ゲ、國民ニ清範ヲ示スベシ」と淨土一宗に諭示せられて居りますが、今年、戦闘は更に苛烈を極むるであります。今こそ私共が皇國佛教の精華たる念佛教徒の眞面目を發揮し、國恩、祖恩に報答すべき秋と信じます。



# 内面的生活の求む

吉田 絃 二 郎

人間生涯の毀譽褒貶棺を蓋うて定まるといふことは定説のやうに考へられてゐるが、靜かに世間の實相を觀察して見ると、さうばかりでもない。生きてゐる間に不運であり、死後も亦不運である人もある。しかしこれも小我的な見解から観るからであつて、大我的立場から考ゆれば、究竟に於いては正しいものは正しいところに落ちつくにちがひない。

このころ、新田義貞の傳記などを讀み直して見ると、義貞といふ人なども、物語などでは大分不運な立場に置かれてゐるやうに思ふ。殊に太平記の作者などは故意に義貞に對しては惡意をもつて終始してゐるやうに思はれる。勾當の内侍を賜はり、そのために進發の機を逸したといふやうなことも、義貞の生涯の勤皇の致

し方から見て、そのまゝに受け容れがたい。紙背に徹する眼光はなくとも、すこしく落ちついて考ふれば、疑ひがわく筈である。足利高氏を鎌倉に攻むるために箱根まで進發して、箱根から散々に打ち敗かされて都に引きあげてゐるが、あの戦さにしても義貞は勝つてゐる。敗け戦さになつたのは、戦さを知らぬ公卿たちのためであつた。これは恰かも戦さを知らぬ公卿の一味が正成を湊川に討死させたのと同じ行き方である。

楠正成は古今の名將であり、百戰百勝の大戦術家である。正成の戦法の前には誰れを出しても光りが薄くなる。義貞のごときも鎌倉に北條を討つた手並などを考へると、並々ならぬ勇將であり、智將であるが、正成の前に置かれると光りが乏しくなる。自然、義貞は敗け戦さばかりしてゐたかのやうな感じをあたへる。また世間には義貞にしても、一步誤れば高氏と同じことをたくらむであらう

と考へる人もあつた。これなども義貞にとつては迷惑なことであつたにちがひない。あの聖人ともいふべき楠公がいつも蔭になり、日向になつて義貞を庇ひ、義貞を助けてをられるところを見ても、決して義貞といふ人物が太平記あたりに描かれてゐるやうな人ではなかつたことを想像させる。楠公が湊川で討死されたのは無論君國のためであるが、正成がわざわざ不利な陣地を選んでまで陣を張つたのは、義貞を助けたいためであつた。正成は義貞の官軍側に於ける地位を考へて、義貞を助けたともいへるが、討死の前夜、義貞と二人でしみじみ語つてゐるところなど考へ合はせると、もつと二人の間には人間的に共鳴共感するところがあつたのであらう。ともかく新田義貞といふやうな人は尙ほ一度正しく見直す必要がある。と、同時に書を讀むことのむづかしさを思ふ。

太平記に赤坂合戦のをり北條方の家來で、

七十三歳の老武者人見四郎入道恩阿と三十七歳の本間九郎資頼が討死したことを書いてある。入道恩阿は本間に向つて北條家の運命も遠くはあるまい。主家の滅亡を見るにも忍びない。それに自分は齡七十三になる。今ヨリ後サシタル思出モナキ身ノソマロニ長活シテ武運傾カンヲ見モ老後ノ恨ミ、臨終ノサハリ共成ヌベケレバ、明日ノ合戦ニ先懸シテ、一番ニ打死シテ、其名ヲ末代ニ殘サント存ズル也」と語り、朝霞の中にたゞ二人で抜け懸けして討死をしてゐる。つゞいて本間が一子源内兵衛資忠生年十八歳も亦父と同じく赤坂城の一木戸に進んで討死の志を遂げてゐる。なほ上宮太子の御堂の御前の石の鳥居には、入道恩阿の花さかぬ老木の櫻朽ぬとも其名は苔の下にかくれしといふ歌と、源内兵衛資忠のまてしばし子を思ふ暗にまよふらむ六の岐の道しるへせむといふ歌が書き記されたところ。太平記には到るところに名を惜しむ當時の武人の物語が載せられてあるが、名を惜しむといふ考へは、日本武士特有のものであつて、いかなる

外國にも見出すことのできないものである。殊に強く感じられることは宗教といふものと當時の武士の精神生活との唯一無二な關係である。楠公が馬を天王寺の前に立て、六波羅勢を惱ました折のことである。いはゞ兵馬倥傯の間であるが、楠公は住吉に參詣して神馬三疋を獻じ、翌日は天王寺に參詣して、白鞍置きたる馬に白輻輪の鎧一領を添へて進物としてをられる。これは大般若經轉讀の御布施として上げられたものである。楠公の信仰のほどがしのばれる。

楠公に始まつたことではないが、昔からすぐれた日本の武將たちは皆な深い信仰に生きてゐた。信仰の深さあつてこそ、その人の生活にゆかしさも見られ、その人の武道にも光りが添つて来る。眞の武將名將といふ人たちは例外なく深い信仰を持つた人である。將軍田村鷹、源義家、頼朝、重盛、時頼、義貞、信玄、謙信、清正、みな然りである。

戦さが長くなるにつれて一面人心の荒ぶといふことはいつの世にも免れないところであらうが、その反面に戦さのさなかほど人の心の引き緊るをりはない。戦さの巷にこそ能谷蓮生坊のやうな信仰の人も生まれる。突き詰

めた生死の觀念に於いて生き貫く際にこそ、生一本な信仰生活が生まれるであらう。ありがたき生を受け、そのありがたき人生も今日一日である。この一刹那のみである。といふことを如實に感じつゝ生きて行く戦さのさなかほど、信仰生活にとつてありがたい機縁はない。

このころ新島襄先生誕生百年記念講演會が日比谷あたりで催されたことを新聞で讀んだ。また近く綱島梁川先生追憶の講演會が本郷あたりで催されるらしい。たしかに人々の心の片隅には、今、内面的な生活の深さを求めてゐるものがある。かういふ際に行誠上人のやうなお方の御生涯なり、御信仰なりについて、一般の人たちに、もつと廣く知らせるやうな催しを宗門の人々に是非共やつていたゞき度いといふのは、わたくし一人の念願ではないと思ふ。信仰的人格は永遠に生きる。しかも今日ほど強く信仰に生きたる人格を待望する時代はない。





宗教團體勤勞報國隊の活躍する

# 新入炭坑を見る

島野禎祥

九州八幡から近い折尾で乗換へて、筑前植木といふ驛で下車し、それから半里ほど歩いた所に新入炭坑がある。植木から炭坑までの道は炭坑村といった感じの全然ない至極のんびりした農村なので一寸意外であつた。しかし野良に働く人々の頭を越してはるか向ふに、ピラミット型の山をいくつも望むと、あゝあれだと思はず緊張してくる。山といつてもこの山は選炭くづでつくられたボタ山で、地圖には勿論ない山であつた。

てみます」の言葉を思ひ出してゐた。これは矢張り千葉縣の佛教團體で結成された勤勞報國隊が、北海道の夕張炭坑に行き、その現場での感想、戰場精神を語つてよこしたものである。

大阪の宗教團體戦時地方委員會から派遣された勤勞報國隊が九州の新入炭坑で活躍してゐた。その中に混つて浄土宗の寺院住職だけでも三十餘名が参加してゐた。この人達を慰問し激勵し、併せて炭坑を見學してこいといふ命令を浄土宗報國會から受けて、急に本部理事長江藤激英師と私とが炭坑に出掛けることになつた。

先づ私達は勞務課の係りの案内で、報國隊員の寄宿舎「共愛寮」を訪れた。そこで早くも本宗寺院住職のたくましい勤勞姿に接することが出来た。彼等は喜んで私達を迎へてくれた。しかし折から交換時間であるのであらう、今坑から歸つて、一風呂あびたの彼といふ人があるかと思ふと、他方には、「これから入坑ですから失禮します」と勇んで出掛けてゆく人もあつた。

度から「ここでも戦つてゐる」といふ空氣が流れ出してゐた。私はこの時、友人から受取つた手紙の一節——「夕張岳の頂きは白雲でおほはれました。漸く仕事にも馴れてきました。夕張の炭掘る人の腕の中には敵撃滅の心血がおどつ

た。その中に混つて浄土宗の寺院住職だけでも三十餘名が参加してゐた。この人達を慰問し激勵し、併せて炭坑を見學してこいといふ命令を浄土宗報國會から受けて、急に本部理事長江藤激英師と私とが炭坑に出掛けることになつた。

私達は顔見知りの誰彼れとなく話を交へながら、歸つた人、坑に入る人の忙しさうな姿を眺めて唯々有難いことだと感じ入つた。これらの人は二十四時間を三交替制で夜も晝もなく續けて働いてゐるのである。三交替制を實施してゐる。

る坑はここが最初で、非常に成績が擧つてゐる。このことであつた。丁度その時夜を徹して働くために夕方五時に辨當箱をさげて坑に入つてゆく人々があつた。この人達を送り出してから私達は少し餘裕を得て色々の體験を聞くことが出来た。

勤勞報國隊の人達はもとより探炭は初めての經驗であつた。従つて仕事に馴れるまで餘けいな苦勞も多かつたに違ひない。水虫でやられた足で凸凹のはげしい坑道を歩むのに骨を折つたといふ人もあつた。冷へて痔を起したが、狭くて前こごみでゐる坑の中で痔の痛みに耐へ抜いたと語る人もあつた。落磐のため埋められたが奇蹟的に救けられるまで、二時間もの間岩の下で苦しんだといふ人もあつた。救ひ出されて直ちに入院して加療を受けたが僅か一週間ばかりしか経つてゐないといふのに、



今日からまた入坑してゐます。元氣よく笑ふ人もあつた。しかし私達は笑ふに笑へずこの人達の苦心と熱意に目頭の熱くなるのを感じた。自分達が一塊でも多く掘らねばすぐさま前線に影響するのだと、あらゆる困難と戦つて挺身實踐してゐる姿には合點せずにはゐられなかつた。しかもこうして日夜勤勞に疲れた身體を以て、餘暇を見つけてはあちこちの寄

のついた帽子をかぶると見かけは立派な坑夫姿となつた。炭坑の技師で坑内の神様みたいな人だと呼ばれる操入主任と勞務課の人が案内役で迎へにきてくれた。それに昨夜は徹夜で入坑してゐた霞間君が仕事着のまゝできてくれ、案内してはあちこちの寄宿舍を訪ね、他の坑夫たちに紙芝居を演じては慰安と教化とを與へることを忘れぬ人達であつた。翌朝になつて八時に入坑御案内しませうとの約束で私達は事務所で貸してくれ

補佐役として同行してくれることになつた。

坑内への入口の所は操入學校と呼ぶ會場になつてゐる。正面には天照大神がまつられ、わきに「誓ひ」がはられてゐる。工員たちは入坑前に仕事着をつけて全部ここに集り、隊長の指揮で先づ國民儀禮があつて「誓ひ」を朗唱し、それから肅々と入坑するのである。黙々として動く彼等の姿からは探炭報國の精神が溢れ出してゐた。人車操入車が出るまでの間、私達は選炭機を見た。そして一握の石炭もがこの勞苦を経てくる事であると判り、しみじみとした氣持になつた。やがて來た人車操入車に乗つて、眞暗な坑道を下つた。車といつてもやつと身體が入る位に狭いものである。帽子のキャップライトが氣味悪く光つてゐた。人車を下りてから現場までは可成り遠い。石炭を運ぶトロツコが往來する線路が坑内を走り、中央にはワイヤーが走つてゐる。眞暗な前後から何十臺とつながつたトロツコが走つて來る。が馴れぬ私達は其の音すら聞き分けられず、その都度主任に注意されて危げに飛んでよけるのであつた。坑道には無數に立てられた直徑七八寸もある坑木があつて、中にはまるで箸でも折つたやうに折れたものもあつた。それは地壓のために折られたもので、

坑木が折れてもすぐ落盤することはないとのことであつた。私達はこの折れた坑木に何度頭を打ち當てたか判らなかつた。頭に氣をとられ、ば足が危い。足に注意すれば頭をぶつける。それなのに坑道に働く人々はこの道を馳足で行くといはれて驚いてしまつた。私達は線路をなほしてゐる人、坑木を修理してゐる人等のわきを通つて一里位の道のりを一時間半ほどかゝつて現場についた。私達の作業服はいつか汗ですつかりぬれてゐた。作業をしてゐる人達が皆裸であるのも成程とうなづかれた。

現場は地下三千米だと聞いて驚いた。富士を倒さにして埋めたのと同じだねと誰かが云つた。現場では立つては歩けない。腰をかゝめてやつと歩いた。そこで石炭が掘られると、すぐ坑木が作られる。石炭がトロツコに入れられる。即ち現場では仕繰、採炭、屈進などに分れてそれ／＼働くのである。浄土宗の勤勞報國隊長が屈進機を握つて先頭に働いてゐた。裸の體が汗と炭粉にまみれて石炭によどむ姿は聖い姿であつた。江藤理事長がそのわきで汗を一ぱいかきながらツルハシを振つて石炭をくづしてゐた。地下三千米のこの現場こそ現在一機一彈でも多くと生産増強に邁進してゐるあらゆる作

業の營養を一手で引き受けてゐる所なのである。この石炭がやがて船となり飛行機となり大砲となる。一握でも多くの石炭を掘るといふことが直ちに戦力の増強なのである。石炭と戦ふこの人々こそは戦力の基礎である。

やがて主任は私達を案内して間道とも云ふべ



き今廢道にしてゐる坑道を通つて歸途について。ここはシンとして何の音も聞えなかつた。すると向ふから工業學校を出たばかりらしい紅顔の青年が坑道内のガス發生を守るため機械を背負つて單身歩いてきた。こうした人もある。

歩きながら主任は私達にこう語つた。

「増産命令はどし／＼來ます。見られるやうにまだ石炭は掘れば充分出ます。だが掘る人が足りない。宗教家の人々がこうして坑内で働いて下さる意味もここにあります。どうかもつと石炭掘る人を送るやうに願ひします」

深い水たまりや落盤で漸く身體を抜けられるやうな穴を通つて私達は人車が出るところまでやつと辿りついた。その時フト葭間君が「この坑内から外に出ると空氣がうまいですよ」と云つた。人車に乗つて十分、坑外に出た時はほんとに空氣の味がするやうだつた。急に太陽の光線の直射をうけて目がぎら／＼した。ほんとに坑内で働く人々の眞剣な姿を今こそ世に訴へないではゐられないと思つた。私達はいろ／＼の感激に緊張しきつた頭をかゝへて、汗と炭粉でまみれた作業服を脱いだ。「石炭を掘る人が足りない。一人でも多くの石炭増産の戦士を送つて下さい」と訴へた主任の言葉が私の耳に何度かきこえてゐた。今や増産挺身報國の旗が全國にひるがへつてゐる。これこそ米英撃滅の進軍譜である。法衣を作業服に、數珠を鶴嘴に取りかへて、石炭に戦ふ尊い姿をほんとに有難くおがんだのであつた。(中村芳子畫)

童話

お釈迦さまと

水差し屋

坪上勳夫

むかし、まだお釈迦さまが御在世の頃、印度に一人の水差し瓶や、水甕を造る人がありました。この人はなかなか立派な腕前を持つてゐて見事な瓶を澤山に作るのですが、けちで怒りっぽい性質を持つてゐました。そのために隣近所の人々からも嫌はれ、交際する者もありませんでした。人さへ見れば誰彼れの見境へなく朝から晩まで怒鳴りちらしてゐました。

ある日のこと、お釈迦さまが托鉢の途中にその水差し屋の前に立たれました。丁度その時一つの水差しが出来かゝつてゐる所で、小さな一掴みの粘土を附けやうとしてゐたものですから、大事な仕事の邪魔になつたと大變怒りました。いきなり手に握つてゐた一掴みの粘土をお釈迦さまの顔を目がけて叩きつけ、

「うるさい。貴様のやうな奴にやるものは何もない。これでも食へ」

とりました。お釈迦さまは左手で軽くその粘土をお受けになり、

「財寶二世功德無量波羅密。そなたの布施は有難く頂戴した。しかしこの一塊の土をくれてしまつて定めし困るであらう。そなたの作る水差しにはなくてはならぬ土である。どうして今日以後そなたの作る瓶や甕が水の漏らぬやうになるであらうか。そなたの慳貪な心の改まらぬうちは、その水差しに水は溜まるまい。」

と仰つて静かにお歸りになりました。

怒りの餘り投げつけたものの、よく考へればあの土は最後の仕上げの粘土でした。止むなく別の粘土でその水差しを仕上げましたが、氣懸りなので、早速泉水の所にゆき水を入れてみました。すると不思議にも水は一滴もその水差しに溜まりません。夢中になつて家を飛び出し、ガンヂス河の流れに参り、水の中に投げ入れしました。しかし恐る／＼水から取り上げた水差しの中には矢張り水が溜まつてゐませんでした。それから後はあちらの湖、こちらの河と尋ね歩いて水差しに水を入れてみましたが、一滴の水も溜りません。かうして三年三月の間至る所の水をくんでみました。何處の水も水差しには溜つてくれません。そして遂に印度洋の磯邊

に辿りつきました。次から次に打ち寄せてくる大波を前にして、岸邊に茂る椰子の樹蔭に思はずたたずんでしまひました。疲れはてゝ思はずウトウトと眠ると、恐ろしい夢をみました。夢の中には怖れ戦き泣き叫ぶ妻子の有様がありました。餘り邪慳な行ひをするので隣近所の人達がほと／＼困つてゐる姿がありました。今まで他人の迷惑を知らないで振舞つてきた所行が鏡に映るやうにはつきり見えてきました。

風の音に目を覺ましてみると、つく／＼悔恨の情に胸が引き締められました。彼の兩眼は胸先きから込上げてくる清らかな涙でぬれられました。その涙の一滴が頬に沿ふて流れ、それが膝の上に置いてあつた水差しの中へボタリと落ちました。すると今までは何うしても水の溜らなかつた水差しの中から清らかな水が渾然として湧き出てきました。みるみる内に水が水差しの中に一ぱいになり、やがて縁から溢れ出てきました。水は尙もこんこんと湧いて、そこから湧き出る水が小川のやうに流れ始め、磯邊から印度洋にそゞぎました。彼は思はず立ち上つて水差しに向つて恭々しく合掌しました。水差しから溢れ出る水の面にはお釈迦さまが微笑んでゐる顔がありありと映つてゐました。



歎佛偈講義……一六

# 大東亞を融かす心

大野 法 道

一  
已に我が國に到らば快樂安穩ならしめん  
之は第十七偈の後半であり、淨土の五つの徳  
を擧げる中の第五として、淨土は快樂安穩の  
世界であると告げられるのである。

そこで快樂安穩の世界といふものを考へて  
みる。お互ひ人間は、何かの樂しきを持つて  
生きてゐる。何の樂しみもなくなつてしまつた  
のでは、まづ氣力が衰へるばかりか、體力も  
續かぬこととなるであらう。

ところが、その樂み方についても種々あつ  
て、數へれば際限もないが、樂みの性質から  
わければ享樂と眞樂とに分れる。たゞ眼・耳・  
鼻・舌・身の五官に感じる反射的の樂み、た  
とへば綺麗な物を見たり、美味しい物を喰べ  
たりするだけを楽しみとし、それを追ふてゐる

のが享樂であり、佛教では之を五欲の樂と言  
ふ。眞樂は更に深い樂みで、眞に生きてゆく  
ところに味はふ樂みである。

言ふまでもなく、單なる享樂が人生の本當  
のものでなく、何人といへども一層深いもの  
を求めやうとしてゐるには違ひないが、それ  
には樂みの虚と實とを明らかにせねばなら  
ぬ。

## 二

日本人の本懐に適ふ樂みこそは實であり、  
それに外れてゐるものは虚である。

物から来る樂みはいつ消えるか判らず、永  
續するとは限らぬから、本當の樂みにはなら  
ない。物を離れた心の中の樂みが眞の樂みで  
あると、言はれることがあるけれども、かう  
した考へ方は、樂みを正しく見るものではな

いと思ふ。

早い話が、ずつと無病で來た人は特に感じ  
てゐないかも知れぬが、不幸にも大患に罹  
つてしかも全快し、その後は恙なく暮してゐ  
る人にあつては、先づ健康であることを何よ  
りも樂みとする。之は身體といふ物から来る  
樂みであるが、働く基本の確立を樂むのであ  
つて、樂みの眞なるものでなければならぬか  
らである。

日本人の本懐は、言ふまでもなくわが身の  
力の及ぶかぎり、お國のために盡すことであ  
り、その道は、大御心を奉戴して眞に生きぬ  
く所にある。

それには何よりもこの身が健康で、まめに  
働くことのできるのが第一である。病氣その  
他の場合にあつても、眞に生きる樂みはある  
けれども、健康に増す樂みはないであらう。

日本人の働く心の底には、之でお國に盡さ  
せて頂くといいふ大なる樂みが流れてゐる。戦  
場の勇士が敵を撃つ一心に燃えて、忠誠の限  
りをつくす働きは勿論のこと、銃後にあつて  
の働きは業務職務によつて各種各様であり、  
國務を司るもの、國民精神の育成、昂揚、  
顯正を事とするもの、軍需品や食糧の増産に

いそしむもの、生活資料の製造流通を業とするものなどに分れるが、いづれも、日本人の本懐に適ふものとして努め勵むところに、得も言はれぬ大なる樂みの眞實なるものが感ぜられる。もし個人の利得や幸福を主なるものとして働いてゐるやうなことがあれば、それは日本人の本懐から外れたものであり、樂むべからざるものを虚しく樂む邪道に落ちてゐるものである。

## 三

佛教は、物から離れた心だけの樂みを目ざすものではなく、法に稱ひ天に通ずる大きな心——私心を去つた無我の至誠を以て、物の中に生きてゆく道を開くものである。この道にあつては、物が單なる物でなく、すべて心に融けて生きてゐるのであり、心は物を抜きにした觀念だけの世界ではなく、必ず具體物象に於て活躍する。之が「物心一如」と言はれ、色（物）心不二」とも言はれる所以で、物を融かす大きい心に觸れる樂みこそは、凡そ人の世にありうる樂みの最も眞實にして大なるものであらねばならぬ。

淨土が快樂と説かれるのは、かうした物心

一如に生きる樂みであつて、「無上第一、寂滅樂」とも言はれる。阿彌陀佛の淨土は、特にこの點を強調して「極樂世界」と呼ばれるのである。つぎに「安穩」であるが、之は快樂のこゝろに附隨する。つまり、私心で享樂を追ふてゐる生活は泡の如く空虚であり、人生の貴さを破るものであり、危險の上ものであるが、物を生かす大きい心を懷く眞の樂みのある所は、永遠に平和であり、清寧であり、確かである。いつになつても破れることがないから「安穩」である。

## 四

「已に我が國に到らば、快樂安穩ならしめん」といふ言葉は、大東亞戦争が始まつてから滿二年にならうとする今に於て、殊に直接なる感じを與へる。

從來は米英勢力の横行を如何ともなし得なかつた國々が、今やわが日本に來到して、大東亞に一九と成るべく生れ變つてきた。こゝに日本帝國の大精神たる八紘爲宇の、法に稱つた大きい心が、大東亞を生かし融かす光が輝き始めたのである。本當に我が國の導きにより、本來の姿に立ちかへることによつて、

これらの國々には、眞の樂みに満ちた永遠の平和と清寧とがおとづれるであらう。更に昭和十八年十一月五日こそは、正に世界史に劃期的な事實を持つた日である。即ち大東亞の諸國の代表が、文字通りこの日に「我が國に到り、釐殿の下、東京に於て大東亞會議が初めて開かれたのである。

來到した人々は、列席者として中華民國の行政院々長汪精衛氏、泰國の總理大臣代理ワソワイ・タヤコン殿下、滿洲國の總理大臣張景惠氏、フィリッピン國の大統領ホセ・ベ・ラウレル氏、ビルマ國の總理大臣ウー・パ・ー・モウ氏、及び陪席者として自由印度假政府首班のスバス・チャンドラ・ボース氏以下で、我が東條總理大臣以下と、もに一堂に會し、大君の聖慮畏みて、大東亞十億總進軍の態勢を固めた盛舉である。一列に並んだ各代表の寫眞には、大きい心を持つて生きる深大なる樂みが、その全身に満ち溢れてゐる。それを見る我々にも亦、歡喜無量のよろこびが湧きあがる。

まことに大きい心に融けるところ、一切の妖魔は退散して、赫々たる光ある世界には、眞實の樂みの絶えることはないであらう。

# 決 戦 の 春

Ⅱ 國民歌謠ものがたりⅡ

岡 本 一 平 (文と畫)

お國のために役に立つことなら、身の適

不適を觀てゐる場合ではない。お國が望む注文が絶対條件であつて、こちらはたゞ何とかしてその注文に當嵌らうと必死努力するだけである。協調を破る「出過ぎ」も困りものだが、課せられて遠慮「尻込み」は同じく悪い。かういふ心得の下にわたくしは畫描きの癖に歌謠なるものも作る。但しそれは必ずいづかたからかの注文であり作つてお國の役に立つと信ずるものゝみの積りである。自分から「ありのすさみ」或は楽しみに作つたものは一つも無い。

歌謠といふものゝもつ判り易さと親しさと慰めと潤ひと、これによつて國策に沿ふものを説いたなら教訓も樂に吞み込めやうし、士氣昂揚も粘り強いものとならふ。これが私をして作詞といふ畑違ひの仕事をも職域内のご

奉公として苦吟せしむる由縁である。

時局の進みも駭々乎、大東亞戰爭勃發から數へても三年目の春となる。春や春、舊陋習は客歲と共に葬り去り、新昇の元氣は初日の勢ひの如くあらん、この意味では常の如く祝つてよろしき新春である。さりながら決戦の情勢は年の瀬を隔てず滔々と浸して来る。敵味方、國と國との總力戦は門松の日にも鎬をけづりつゝあるのである。春や春、この意味では祝ひなぞは勝ち抜くそれまでお預にして置いてよろしき新春である。年始に代へても、さあ「もう一艦もう一機」銃後國民のこの合言葉を口にし合ひ、しかもいかに速現すべきか、各人おのゝ就ける部署上にて工夫しつゝ實踐し實踐しつゝ工夫すべきであらふ。さあ「もう一艦もう一機」實にわれ等の決戦態勢も焦點を具體的にこゝに集めて來た。

直接にしる間接にしるとにかくこの具體のものゝ増進にあらゆる勵みを向けて行くことが如今即下の國民の大思想であり大精神である。佛教の物心一如といふこともかくして活きた解釋がつく。わたくしもこの標語の持つ重大な意義をより深く同胞と記録し合はふとこの標語を軸に、いま、一つの歌謠を苦作中である。藝能の功德によつて舟釘一本、翼の皮一枚、より増すことが出來たら有難いことだ。いやこの際こんな弱々しい謙遜めいた言葉はよさう。お互ひ一人々々が敵國軍需生産の總額に増し越す意氣を底力から取出してこゝろは既に敵を呑むものであつて却つて沈着敏速の行動も出来る。されば數ヶ月前わたくしの作つた貯蓄奨勵の歌にも

腕で來るなら 腕で來い  
數で來るなら 數で來い  
高さで來るなら それもよし

アメリカ自慢の 摩天樓  
弗で積むなら 圓で積む  
蒼空圏をも なんのその

見よ 日の丸煌めく貯蓄塔  
見よ 日の丸煌めく貯蓄塔  
見よ 日の丸煌めく貯蓄塔 (以下略)  
Ⅱ 日の丸きらめく貯蓄塔 よりⅡ

かゝる意氣を高揚した。由來アメリカ人といふものは東洋の謙讓の美德をさへ弱味と見てつけ上る國民性である。故にわが方に於ても、甘い樂觀や粗暴な空威張りはもとより警しむべきだが、必ず實行によつて證據のほどを示す國民の強い覺悟と大きな意氣込みは屹度判らして置かねばならぬ。この歌謠にして

もこれを作つた半年ほどまへと今日と、國民が貯蓄なるものに對する理解と熱誠はたいした増し方である。「蒼空圖をもなんのその」と謠つたのはこの情勢を豫告することに於て決して誇大の形容詞では無かつた。正當の意味の流行歌謠には、何等かの指導性と忠言と激勵が含まれてゐる筈である、殊

に時局下のそれに於ては。然もその含むところのものを邦人傳統の趣味情緒に溶かし國民本來の魂に訴へ最も單的に最も自然に戰時下必需の力を喚發せしむる。含むところのものは國策の趣旨であり、訴へる目宛は國民の魂である。正當の意味の流行歌謠なるものは、この兩者間の懇切忠實な橋渡しであるべきだ。流行といふ字は面白くないが、通俗にして普及性あるとでも解すべく、流行歌謠が獨善的のものであつたらその歌は作詞家自身の鼻うたに過ぎなからふ。こゝに技術上作詞家の苦心が存するのであるが、と同時にいかに國策に添ふことを上手に面白く歌つたところで、國民本來の魂に慧敏な感受性と受肯力が無くば結局馬の耳に念佛に違ひない。負

しいながらも、わたくしの從來の經驗に徴するに、例へばわたくしが一つの歌謠を作する。それには前述の如く、何等かの指導性と忠言と激勵を含めたとする。そのときはその必要あるかに考へて、多少進んだ地歩より作したつもりである。しかしそれが唄はれ廣まる僅の間に一般國民の現實は歌中を含められてある指導性も忠言も激勵も必要としないほど進んでゐる。歌謠の普及性の中には新味とい



女性すら  
決戦の士気

梅の花

如く  
凛冽

なる  
大和

の  
美言

一平

ふことも要素の一つである。すでに百も承知であり、より以上に實行されつゝあるものをこと新し氣に喋々する歌は變なものになる。故にその歌は廢れて忘れられ或は古典歌となる。この間は實に僅なものである。流行歌謡くらゐ果敢ないものはないといへばそうに違ひないが、ある面より見て、これは果敢ないほど結構なことに違ひない。それだけ早く抽象の詞が實行に移せたのだから。

かつ置きかつ散る露の玉の如く、燃えては消え消えては燃ゆる不知火の如く、わたくしはいくつかの歌謡をものして來た。その果敢なさを却つて悦びながら、しかも遂に思ひ當つて來たことは、この作業は決して進んだ地歩より導くとか勵ますとかといふ性質のものではない。元來わが國民の氣持の中に存するものを假りに韻詞によつて綴つて差上るまでのものである。でなければどうしてかくも、速に實現できやふぞ。かく思ひ當るにつけ、いよいよ感じられるのはわが民族同胞の偉大さである。それは「總てを藏する」といふことでもあるし、それは「總てが能ふ」といふことでもある。春や春、われ等の歴史上の人物には矛を横へつゝ月下に詩を賦した老

雄もあれば、腋に花を翳して敵陣へ七度掛けした若武者もある。この邊夷狄が洋服を着けただけの敵國人と素性が違ふところだ。もちろんわれ等絶対に油斷はしない。防空服に身を固め、防火資材の點檢もおさ／＼滞りなく、さてその上で、見張所の角に立ちてはつ空を仰げば

元朝や神代のことも思はるゝ

由緒正しきわが國柄の美、惠みも深き國土の自然、その有難さが今更ながらうららかに晴れた浅みどりの空より、しみ／＼と心に染み來るのである。この寶を藏してならふか、決して穢すまい。然るときまた思ひ出されて來るのは、わが民族同胞の頼もしさである。それは探出せば無限に探出せるところの「總てを藏する」國民であり、それは成さすれば成

歌 壇



兵庫縣養老所 春 本 總  
農繁に入ればしばらく見舞はずと  
太き御手より錢たまふ父  
田仕事に汚れて太き父上の手を見  
てあれば涙ながれぬ  
評 二首とも身に沁みるよい作である。病兵となつた我が子を見舞ふ父親は動地な百姓である。進色に焦げた太い手を又なつかしく思ふのである。

東京 鈴木 修 吉  
鐵をきる我が掌の荒れに荒れ堪へゆく力身にぞ覺ゆる  
評 兵隊を作る重工業にたづさはつてある作者の心のひらは流れて無より固くなつてしまつた。さう云ふ仕事に堪へてゆく中に心はさう云ふ仕事に何のやるぞと云ふ意氣がみなぎると云ふのである。

高崎市 大塚 光子  
清き香を保つ花かな白菊の花にならひて我はあらまし

評 女らしい清らかなしづかなおもひである。白菊の香の高きをかきつつ自分もこんなきよいうつくしい生き方をしたいと念じるのであつた。

兵庫縣 山本多可子  
國の秋はしづけし  
乾麵を嚼る車上の揺れに揺れ砲車は進む月光の谷  
名古屋 相馬 藍子  
ひとり來て夕陽の赤き満洲を見れば地球の果ての心地す  
比島渡道軍 森山 隆 應  
はるぼると渡り來しかな椰子の葉の蔭に夕日の沈めるを見る  
東京 須田 佐多夫  
戦ひの苛烈なる日に我がおもひ燃りて激しえみし等撃たむ  
高崎陸軍病院 大塚 晚 雷  
スクリンに義足の兵の現はれてすぐに消えしが身に沁みにけり

らざることなき「總てが能ふ」國民であるといふことである。元朝の朝みどりの空を眺めて、春や春、手に火叩きの柄を握り／＼めて、春や春、わたくしはこの國民同胞に對する敬愛と信頼の念を、わたくしの從來作つた歌謡の若干の経験から、語り度くおもふ。これわたくし分際のものよりする決戦の春の賀詞であり、防人の詩である。結局は、一億一心が

この自信を跳躍台として、前年には較べものにならぬ戦力増強の實績を本年度に於て擧げんとなり。因に述べてをくのは歌謡にも不易と流行とあることだ。これは芭蕉が俳句に就いていつた分析を借りて使

### アメリカは三申の春

て出發したのはたしか昭和十五年の歳とおもふ。そのまへまで歌謡を作らふなぞとは夢にも思はなかつたわたくしが、放送局より頼まれして國民歌謡の一つとして、韻律の文字を



はこの際省き、つまり不易性の歌謡は永く持續する種子を歌ひ籠めてあるもので長時に用ゐられる。流行性の歌謡は一時、對象的に歌ひ宛てるのだから用ゐられるのも短い。芭蕉の説は別として、わたくしは歌謡にはこの兩種おの／＼分擔するところがあるから優劣なく兩方あつて然るべきものとおもふ。たとへば薬にしる長時間用ゆべき滋強劑のやふなものもあれば、應急手當用の注射薬もあるといふわけである。

とんとんとんからりと 隣組

格子を開ければ 顔なじみ

廻して頂戴 回覧板

教へられたり 教へたり

「隣組」より以下略

防火群といつただけのものが隣組ともなり、國民生活に缺くべからざる機構單位とし

### 日本の大戦果に

對しルーズベルトは

国民に見ザル

ヤカザル言ハザル

ヲ強ひる



始めて操り、とにかく物してみた處女作がこれである。以後斯道に縁付けられたわたくしにとつても記念の作であるが、そんなことはどうでもよろしい。この時分回覧板がすでに珍らしく、玄米食が新に奨励され、協同して

の防火防犯、當時隣組としてすべきことと心得べきこと、要目だけは歌ひ込んだつもりだ。それがどうであらふ、三四年経たぬ間に配給にしる貯蓄にしる供出にしるすべて隣組の機構によつて行はれ、複雑多岐な團體生活が圓滑に運営されてゐる。觀てこの歌謡は原始的な民謡の響を帯びるに過ぎない。

由來わが國民は團體的なことに不得手とケナされてゐたものがこの上達に大に意を強くするのである。隣組の心得中、すでに上達し歌謡に於ても不用に附してよろしい文句もあるが、多々ます／＼努力してその輝光を大にして行きたい文句も無いことはない。わたくしはこの歌謡の第四章目に「何軒あらうと一世帯 心は一つの屋根の月纏められたり纏めたり」と歌つたのであるが、これは近所合壁の隣組なればこう何軒あらふと一世帯である。これを町にしたら何百軒あらふと一世帯である。更に眼を高くして眺むれば、大共榮園といふものがある。かうなると何億軒あらふと我邦を組長さんにしての一世帯である。八紘一宇の空の月、心を合せ力を共にし、國域を覗く外敵の闇を永遠に寄せつけぬやふ國をひ抜くべきである。



# 無名の英靈

佐藤 賢 順

その朝も新聞の發表を讀み終ると、「自爆未歸還十五機之英靈」と嚴肅な氣持で紙に書いて、傍に小さく月日を書き入れ、いつものやうに佛前に安置して、誠を籠めて回向をした。好く晴れた爽やかな朝であつたが、冷たさが肌に沁み

た。毎朝の新聞で、その時々、の戦果を讀むとほつとして氣を緩め、遠く遙かなる戦線へ感謝を送り、それから、この輝く戦果の蔭に拂はれたこちらの尊い犠牲は何ほどであつたらうかと、觸れたくないものに觸れる氣持で、そつと覗くのである。今朝も、未だ歸らざる十五機が發表されてゐる。南浜に玉碎した歸らぬ勇士のために、心からなる回向を捧げることが、われわれのせめてもの勤めである。

この草廬ではラジオはなし夕刊は翌日の朝刊と一しよになるので、今朝までこの戦果を知らなかつたが、昨夕ラジオで發表されたといふこ

とであるから、さぞ街中は戦捷の感激が明かるく流れたことであらう。その感激が大きければ大きいだけに、尊い犠牲への哀悼も深い。

過日も、出陣する學徒の壮行會が研究室で催された時、一杯の紅茶を啜りながら——そして

ただそれだけの錢で、多年育てた學徒を送つたのであるが——私はこんなことを話した。この頃、新聞を見ると、敵の損害二十に對して味方の犠牲一とか二十五に對して一とかいふことが出てゐて、敵味方の開きは、五對一が十對一になり二十對一になつて、なるほど味方はいよいよ優勢であるが、然し、たとへ敵軍幾千幾萬を屠らうとも、もし味方を一人たりとも失へば、われわれの痛恨は言ひやうもない。「全機無事歸還せり」とあるのを讀んで、初めてはつとするのである。敵兵は波止場ごろつきか苦力みたいな雑兵だし、味方は一粒選りの珠玉であり精兵である。諸君は多年人間としての教養を積

## 武士の心得之二題

### 要は突撃にあり

加賀藩主前田利常に仕へた人で大音主馬助といふ老武者があつた。或る時同じ家中の若い者が集つて「麒麟も老ぬれば駄馬に等しいといふから大音氏も最早十分なお働きも難しからう」と等と話し合つてゐた。それを耳にした主馬助は若い者に次のやうにさととして聞かせた。

「五町十町と馳けつけてゆくといふのも、要は敵の真中に只一人かけ入らんがためである。ただ早く馳けて行つたからとで、それだけでは益ないことである。鎧あひは僅か六七間の間のことであつて、この僅かの距離を誰よりも早く突き込むことが難しいのである。

拙者も老たれば若い方々のやうに五町十町と先きに走ることが出来ないが、皆の後からついてゆく位ならば出來さうである。そして鎧あひ六七間の所にきてから、箭玉のはげしく飛び來る中を突き進む段になれば決して遅れはとらぬ覺悟をしてゐる。若いからといつて最後の突撃に遅れぬとは云へないであらう。」

老て心ますます剛毅な主馬助の言葉に一同は

み武人としての訓練をも受けた精兵中の精兵である。たとへ幾萬の敵を殲滅しようと、それと數で比べられてはたまらない。諸君一人は實によく敵一千にも一萬にも當るのである。送る方は掌中の珠玉を捧げる心持だから、どうか諸君は、自重し敢闘して國民の期待に答へてもらひたい、と。

× × ×

今朝の「自爆未歸還十五機之英靈」は、何といふ勇士であるか。まだその名は判らない。それは一々發表されることがないかもしれない。たまたま指揮官機の名が發表されたので、われわれは指揮官の名だけを知ることができたが、それは個人の武勳を傳へるためよりは、率先垂範の指揮官魂を示すためであらう。かうして幾多の勇士は名を知られることを求めず、南溟に散つたのである。

餘程前であるが、田代中佐の南方戦線視察談の一節に、こんなことがあつた。南方の或る飛行基地を訪れた時のこと、若い士官が互に腕を鳴らして頑敵撃滅を語り合つてゐる中に、一人が、眞珠灣攻撃に参加できなかったのはかへすがへす残念である、一度はああいふ華々しい戦闘に参加して武勳を立ててみたい、と語るの

であつた。先任將校がこれを聞いてゐて、自分一人が華々しい手柄を立てたいなどといふそんな心掛けでどうするか。多くの兵の中には、艦の機關室へ入つたまま、上ではどんな戦争が行はれてゐるかをさへ知らずに、艦と運命を共にする者さへあるのだ。そんな心掛なら、もう一度、兵學校へ歸つて教育をし直してもらつてこい、と啗めたといふことである。寔に、これあるかな、と深く胸を打たれる話である。

良寛和尚の詩に、長い年月を禪寺に在つて、特に坐禪をするでもなく、經文を學ぶでもなく、殆んど一生を寮所で黙々として煮炊きのことに過してしまふ禪僧のことを謳つたのがあつた。今、その詩句を思ひ出せないで、慌しく良寛詩歌集を繙くのであるが、どうしたことか、一寸見當らない。たとへ典座(寮所)にあつて一生を雜役のことに過しても、その悟りは坐禪や學問をした者よりは遙かに優れてゐる、いや、大根や菜葉と共に一生を送つて、自分の名譽や榮達を全く忘れた生涯こそ眞に大悟に徹した生涯である、といふやうな詩であつた。

一國の安危と隆替は、一に懸つて、このやうな名を求めぬ人々の雙肩にあるのである。(西峽廬雜記)

云ふべき言葉もなかつた。

## 家康子弟の躰け

家康がある時川に漁をした。その時四歳になる第十子の頼宣に「馬にてこの川を渡れ」と命じた。頼宣は何うも川を渡るのが不安でならず、左右から多くの家來に押へてもらつて、やうやく川を渡つた。これをみてゐた家康はいかにも不興げに「なんといふ卑怯な振舞をするのか、今度渡る時は押へてもらはず、獨りで立派に渡つてみよ」と叱つた。

やがて頼宣が七歳になつた時、矢張り川に漁に出て、側に流れる三四尺ばかりの小川を示し、頼宣に「この川を飛び越へよ」と命じた。頼宣は必死になつて小川を飛んだ。しかし飛び損じて水中に落ちてしまつた。しかし落ちた頼宣の身體は流されもせず、左右の家來に難なく引上げられることが出来た。

餘りに解なく救ひ上げられたので何も知らぬ人達は不思議な感を抱いた。しかし實は、家康はかねてから用意をして、その小川の水底に細引で造つた網をしいておいたのである。頼宣が飛べずに落ちてもしやうに準備をしておいたからに外ならなかつた。

手

帖

保



## 寛 澤 母 子

勝海舟が面白い泥棒の話をしてゐる。むかしは泥棒の稼いだものをまた泥棒することゝを渡世にしてゐた奴があるといふ。大層贅澤をしてゐるどうも怪しい奴があるので引捕へて、手前は泥棒だらうといふと、いやそうではありません、思はぬところに隠してある金を拾ふ渡世ですといふ。それが何んだかちつともわからないので、いろ／＼なだめて詳しくきくと、泥棒といふ奴は、盗んだ金を決してすぐには使はない、當分の間は必ず何處かへ隠して置くものだ、それを嗅ぎ出してこつちで持つて来るのだといふ。どうしてその泥棒が其處へかくしたといふ事がわかるかといふと、悪い事をする人間が物を隠そうなどいふところは大概定まつたものである、それを探し出すには別に苦勞はいりませんとの事だ。海舟は、よし、それなら俺が金をかくして置く、お前がうまくそれを探し出して來たら、お前の罪は許してやるといふと、へえ宜しうございませと云つて牢の中に平氣で何日かゐた。

海舟はその間に部下に命じて、京橋のぎばしの中へ三兩隠した。それからすぐにその男を牢から出してやつて、五六日もすると、その三兩をもつてひよつこりやつて來た。何處に隠してあつた。へえ京橋のぎばしですが、隠し方がほんの素人で商賣人のかくしたものを探すのよりは骨が折れましたと笑つてゐた。流石の海舟もすつかり感心して、この廣い江戸の中から四五日で探し出して来るなどは實に偉いものだ、その三兩は呉れてやるからそれを資本に一つ眞面目な商賣にありついて一生懸命にやつて見ないか、お前なら必ず一かどの成功をするだらうといふと、へえお芳志は有難うございませがお金は要りません、實は京橋の竹河岸の、かう／＼云ふところに五兩隠して置いた奴があります、あれを持つて來て資本にしますからといふことで歸つて行つた。人間といふものは、これでいろ／＼不思議な事の出来るものだ、この力を良い方へ使つたら天下を驚かすような事も出来るのだが、かうした神秘力はどういふものか良い方でなく悪い方によく使はれるから困ると、海舟もほと／＼感心してゐる。

それからもう一人は、何處かの馬丁の家に食客をしてゐながら強盜をやつた奴。こ奴は江戸で大金を盗みためて、それを何處かへ隠しておいては上方へ飛んで行き、上方でまた盗んだ金を何處かへ隠して置いて、一年も経つた頃に知らぬ顔で江戸へかへつて来て、前の隠した金を取り出して、ぼつ／＼使ふ。いよ／＼それが無くなると、また盗み出して、これを隠して上方へ行き、今度は、そつちに隠して置いた金を使つて、それを無くするとまた盗んで隠して、江戸へ戻つて来る。その遣口が實に巧妙で、ふだんはちつとも金のない顔をして、まめ／＼しく働いてみんなの褒め者になつてゐる。それが、とう／＼ばれて、入牢となつたが、そのふだん蟲も殺さぬような大人しい男が忽ちしかも白晝堂々と破獄して、御仕着のまゝ大暴れに暴れながら上州まで逃げて行つて、こゝでやつとつかまつた。これを海舟が御維新の時に放免してやつたが、あの物におどろかぬ、人をほめない人が、その手口には「俺も感心した」と語つてゐるから餘程驚いたものらしい。

のも面白い。「悪」といふものに對する天の力、惡といふものは結局ぶち壊されるといふことがよくわかる。

嘉永四年、江戸に神出鬼没の怪盜が現れた。奉行所へ訴へ出るものでも日に三四件を下らない。

盜賊は或る時は二人、或時はまた三人四人と、また或時は一人と、人数が殖えたり減つたりする。しかし、七人組で押込む事が一番多く、この七人組の荒したところばかりでも實に百四十餘箇所。町方でも、御威光にかゝはるといふので、與力同心が連日總出動血まなこで搜索するが、まるで雲をつかむようで、手もつかない。

江戸中の非難を浴びて、奉行所でも、これを捕へるためには打殺しても差支へないといふ町觸を出して、いつそ警戒を嚴重にしたが、曲者の方はいつこゝろ平氣で、五日目か七日目には殆んど判で押したやうに姿を現して、奪ふものは金ばかり。被害がいよ／＼殖えるばかり。

時の南町奉行は遠山左衛門尉景元。輕い中風に當つて馬へ乗る事が出来ないで、火事

場への出役が勤まらないからと御辭退を願出てゐたが、その出役は西丸御目付勤役中の伴の金四郎に代勤をさせよといふ特別の思召で、とにかく職にある。

景元は即ち市井云ふところの刺青奉行遠山の金さんである。人と爲り懸敏、目付から、御小納戸頭取、更に小普請奉行となり、更に作事奉行、勘定奉行公事方と果進したが、一度で大目付に轉じ、また南奉行となつて、この事件の翌年の春、職を辭して、髪を落し、歸雲と號して悠々隱居の閑日月を送る迄、町奉行勤役十一年。人々稱して、明鑒鏡を懸るが如く人これを欺く能はず、と云つた。

若い頃、放蕩三昧、地獄宿に居候をして、江戸中のやくざ者と交際つたといふ人だが、中風ではどうにも思ふように行かない。ぢり／＼してゐると、ふと、首のない死體が百本杭に流れついた、といふ報告を受けた。

からだ一面の刺青で、しかもそれがとうから俗にいふがえん彫といふ下司なもので、手足の様子からからだつき、檢視の同心は口を揃へて「厩仲間」だといふ事になつた。

しかし、それから先きは、何處の奴かとんとわからない。金さんは、何にかしら、これ

が、江戸荒しの怪盗とつながりがあるように、びーんと来たが、同心達は、そこ迄は行かないか、とかくこれを獨立の事件として扱ひたがる。

時に金さんは四十九歳。中風だかどうしてなか／＼きかない。おのらあ、眼を何處へつけてゐやがなんだと、叱りつけて、督勵するばかりか、自分が土佐の山内侯へ推舉した人入稼業相撲屋政五郎、俗にいふ相政の一家の若いものを總動員で、その首のない、既仲間（いせんか）の身元を洗ひ出した。相政のところは、江戸中の渡り者がやつて来る集だから、なかかないゝ筋だ。

とう／＼これが時の御老中、信州上田五萬三千石松平伊賀守忠優の本郷御馬町上屋敷の既仲間と判明した。死體の身許がわかればもう占たもので、その下手人が京都無宿入墨の藤吉といふものだとかかるには手間暇がかゝらなかつた。

これを直ぐに、伊賀守へ上申すると、誠に予の不面目である、直ちに屋敷の既仲間共一人残らず暇を出し、門前拂を命ずるから、門外に同心詰掛け召捕り呉れよ、との事であ

る。

それで一人残らず引つく／＼り、景元の指圖で、南の與力中の腕つきき吟味與力の原善右衛門が、ひどく痛めつけて口を開かせる

と、果して金さんの睨んだ通り、市中出沒の七人組の怪盗は、この藤吉を首魁とする仲間共と判明した。

晝の間に、町中の様子を探つて置いて、夜になるとぼつり／＼と部屋をぬけ、その上、主人伊賀守の提灯を密かに持出して、藤吉は兩刀を帯び袴をつけて武士姿に化け、他の者はお供になり、主人の急用を以て先きを急ぐ態で、大つびらで市中を歩くから、何處の番所でも、御老中の御家中では、聲をかける事も出来ない譯だ。見廻りの町方役人などは、却つて、御苦勞でござるなどと丁寧に挨拶して行つたものだ。

こうした惡黨の中には、またそれだけの嚴しい掟がある。

第一が奪るものは金銭に限る事、第二が吉原其他遊び所へは一切立入らぬ事の二つであつたが、根が人間の層みたような奴ら、同類の一人が吉原通ひをはじめたのでこれこそ掟

を破り、惡事露顯の元だといふので、隅田堤へ誘ひ出し、ここで皆んなで斬殺して、首と胴を別々に大きな重石をつけて川の中へ沈めたものである。

怪盗も捕へて見れば、屁のような奴ばかり。流石に金さんも苦笑せざるを得なかつただらう。

ところが此奴らが傳馬町へ入つて、その内には首を斬られる事になつてゐると、その年の十二月十四日の晩の九時半に、傳馬町二丁目葛籠屋の新助の宅から火事が出て、通旅籠町から田所町へ燃え抜け、一時は牢屋敷も危かつたので、囚人一同切ほどき、三日内に牢へかへれと云はれて出されたが、どうせ首のないものと覺悟してゐる藤吉はとう／＼牢へかへらず、それつきり行方知れずになつて終ふ。

他の五人は感心にも戻つて来たので、やつと首がつながり遠島になつたが、曲つた根性は何處へ行つても曲つたものか、こ奴ら揃つて島で惡事を働き、呼返されてとう／＼薩刑になつたと、これは、幕末の與力佐久間長敬翁の残した「嘉永日記」に見えてゐる。

ちこの娑婆の火宅にたとふるなり。西の岸といふは即ち極樂寶國にたとふるなり。群賊惡獸偽り親むといふは即ち衆生の六根六識六塵六陰四大なり。人なき空廻の澤といふは即ち常に惡友に従ひて眞の善知識に遇はざるなり。水火の二河といふは即ち衆生の貪愛は水の如く瞋恚は火の如くなるに譬ふるなり。中間の白道四五寸といふは即ち衆生の貪瞋煩惱の中によく清淨の願往生の心を生ずるなり。貪瞋こはきに依るが故に即ち水火の如しと譬ふるなり、願心すくなきが故に白道の如しとたとふるなり。水波常に道をうるほすといふは愛心常におこりて善心を染汗するなり。また火焰つねに道をやくといふは瞋嫌の心よく功德の法財をやくなり。人みちの上をゆきて直に西に向ふといふは即ち諸の行業をめぐらして直に西にむかふに譬ふるなり。

分するに群賊等呼びかへすといふは別解別行惡見人等濫りに見解を説きて相惑亂し、及びみづから罪をつくりて退失するにたとふるなり。西の岸のうへに人ありて呼ばふといふは即ち彌陀の願の意にたとふるなり。須臾に即ち西の岸に到りて善友相見て喜ぶといふは即ち衆生久しく生死に沈みて曠劫に輪廻し迷倒し自ら迷ひて解脱するによしなし、仰ぎて釋迦發遣して西方に向はしめ給ふことを被り、また彌陀の悲心招き呼ばひ給ふによりて二尊の意に信順して水火の二河を願ふ念々に忘るゝことなくかの願力の道に乗じて命を捨て終りて後、彼國に生るゝことを得て佛を見奉りて慶喜すること極りなからんにたとふるなり。行者行住坐臥の三業に修するところ、晝夜時節を問ふことなく常に此の解をなしこの想ひをなすを廻向發願心といふ。また廻向といふは彼の國に生れ終りて大悲をおこして生死にかへりいりて衆生を教化するを廻向となづく。三心既に具すれば行として成ぜすといふことなし。願行既に成じて若し生れずといは

ば、この理あること無けん。已上善導の釋の文なり。(要義問答法語抄九〇一)

## 解 說

目的のない行動と云ふものはありませんが、その目的に向つて常に心をいたすことは當然であつて、その目的達成について熱意のないものは結局何事をもなし得ない半人足に過ぎません。この目的達成の熱意が則ち廻向發願心であります。則ち發願とは目的を立てることであり、廻向とはその目的達成の熱意であるからであります。さればその熱意があれば自分のなす一切の行爲はその目的の爲になされたもので、回向心と云ふものも何か別な外事をなしてから後にその目的にそれをふり向けるのではありません。初めから目的についての事をして居るのであります。ですから「廻向」とは初めからの心持ちであるわけでありす。ですから一切の異學異見別解別行人に何んなに言はれたとて、その目的さへ明確になつて居れば動亂破壊される筈もなく、またされる譯もあり

ません。

またその心が特に「金剛」の如くと強く云はなくても目的を捨てない限り「金剛」であるのは當然なことであります。

然るに今この御法語にこの分り切つた當然なことが特に言はれて居るのは、聖道的な氣持が抜け切れて居らない人々に對して、それはほんのさゝやかなことで大した善根でもないけれども、それを善根と思つて居るので、その人々に對してそれらをも一應「往生淨土」の行にふり向けて單一にしまふことを強調したのであります。だからそれは直ちに「決定眞實心」と云ふことで足りて居るのであります。つまり決定とは「淨土・往生」が確信されたことであり、眞實とは「淨土・往生」の目的に向ふこゝろでなされたことが眞實であつて決して嘘偽りのものでないと云ふことなのであります。

しかもこれを判り易くする爲に「二河白道」の話をもつて来て、絶對絶命の眞實心の上にならば、一歩二歩と目的に向つて邁進するより外に方法もなく、むしろそれ以外は逆轉で

ありあがへりであることを示して居るのであります。

しかもこの譬への中で特に面白いのは「白道」を行くのを「道をたづねて」とか「この道をたづねて」とか「決定してこの道を探ねて往け」とか云ふ「たづねる」と云ふ言葉と、もう一つは「直に進みて道を念じて行く」と云ふ「道を念ずる」と云ふ言葉とであります。廣さ四五寸ばかりの百歩の道でありますから、別段「たづねる」必要はない筈ですが、然し私達の信仰心は實はお先まつくらであつてよくは分らないのです。それは足もとの「四五寸」ばかりの道巾が分るだけであつて、唯だその道には水と火が覆ひかぶつて来てそれを進むには實に覺束ない足取りで歩かねばなりません。

つまり私達は念佛して居りましても單に念佛の聲がわかるだけであり、常に煩惱妄念がむらがり起つて實にあふなつかしいのであります。誠に自信のないことおびたゞしいわけでありす。ですから自分の申す念佛をたづね／＼一歩二歩とすゝませて頂き、またその念佛の一歩一歩を踏みはづさないやうに念願しつゝ一心にたどつて行かねばなりま

せん。ともすれば欲の川の中にとりこたつたり、瞋恚愚痴の炎の中にやかれて行く有様であります。ですから時々片足を踏みはづすこともありますが、すぐまた一生懸命に白道にかちりついて念佛に乗つて行くのであります。

この故にどうしても足もとを念じつゝ進まねばなりません。丁度暗がりを探り／＼歩くやうなもので、一心になつて探りたづね、一心になつて明るさを念じ求めて行かねばなりません。

とは云へ、既に道がある以上は、たとへその道が細々とした小さい道でありませうとも、そしてそれが足もとだけしか明りませんが、知れませんが必ず先方へ行けるはずであります。

ですから「既にこの道あり、必ず渡るべし」との確信を持つことが出来るわけで、此點まことに有り難い次第であります。

さればこの二河白道の譬へは誠に味ひのある譬諭で、私達の胸の中をよく明らかに示したものですから、是非何處も／＼讀んでその内容をシミジミと味ひ、それを信仰の反省として行きたいものであります。

# 編輯後記

△決戦の春を壽ぎ、併せ戦線將兵の武運長久を祈ります。

△吉田綾二郎先生から玉稿を頂き、深謝すると共に今後とも相變らず御指導あらんことを願ひ上げます。

△岡本一平先生から「決戦の春」文字通り新年に相應しい玉稿を頂きました。尚先生からは今後とも引續き御執筆願へることになつてゐます。

△子母澤寛先生から異色ある玉稿をお寄せ下さいました。尚先生からも今後とも引續き玉稿を頂けることになつてゐます。

△島野禎祥氏の「新入炭坑を見る」に於て勤勞奉仕に一塊でも多くの石炭をと挺身する僧侶の姿もさることながら、人さへあつたら石炭はいくらでも堀れる。増産命令を達成するため人を送つて下さい」との按師の言葉はわれ／＼をふるい立たさずにはゐません。一億が心と力を協せて軍需品の増産に邁進しなければなりません。

これこそ戦果に答へる早道です。

△前號は發行が遅れ御迷惑をおかけして恐縮してゐます。何分にも各種の事情が重つてきて思はず遅れました。そしてこれをそのまゝですと、十二月號がお手許に着くのが新春となることになりますので、止むなく本號は十二月、一月兩號の合本と致しました。かゝることは最初にして最後にいたすつもりでゐます。御寛容下さい。

△淨土宗事務部に取扱ふ「慰問淨土」は白衣の勇士から大變に喜ばれ又一方陸海軍大臣からは今まで實に四十五通といふ多數の感謝狀を戴いてゐます。しかるに毎月病院に送る部數が足らぬ勝ちなのに困却してゐます。各位におかれまして本誌を御一覽になり不用になつたものは是非本會宛御返送下さるやう願ひます。本會ではそれを含めて更に病院の方にお取次いたしたいと存じてゐます。御手数ながら病院にもつと淨土が欲しいとの聲に答へて一部でも多く御返送下されば、それだけ多く法味を分け與へることが出来るのであります。

分けて與へることが出来るのであります。

△毎年好評だつた新年號の増刷が出来ませんので、新年號だけの御注文は一切お断り致しました。

△部數を括めて御購入の方が前金切れのため送本中止しその後、例へ會費御納入があつても従前の通りに御送り出来ぬことがありますので、右様お含みの上前金の切れぬ内に會費を御納入下さい。

△中村謙康師著「信仰問答」の發刊が大部遅れ御迷惑をおかけ致しましたが、この遅延刊されました。料金御拂込みの方から送本しました。たが殘部が殆んどなく、開もなく品切れとなる見込みであります。お早くお申込み下さい。

△振替拂込法改正のため、振替にてお拂込みの際は料金の分十錢増にてお願ひ致します。會費なら一圓六十六錢を、書籍その他なら賣價、送料の外に十錢増にてお拂込み下さい。一圓五十六錢だけの御拂込み十一ヶ月分として計算いたします。

淨土十二・一月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和九年十二月一日印刷納本

昭和九年一月一日發行

(定價十二錢)

東京都芝区芝公園十五號明福會館

編輯兼 眞野正順

發行人 眞野正順

印刷人 赤尾光雄

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

日本出版配給株式會社

發行所 法徳上人圓仰會

東京都芝区芝公園十五號明福會館内

電話東京八二二一八七番

郵便掛號二三〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢 (送料一錢)

會費 金一圓五十六錢

一ヶ年 (送料共)

振替拂込みは十錢増のこと。

新刊

中村 辨 康 著

# 信 仰 問 答

賣價三圓十五錢

送料十五錢

總ゆる難問疑義に明解を與へた活きた信仰案内書

誰がも聞き且つ知らんとする  
問題のみの集め、津々々々興る  
味の内に信仰の指針を與へる

著者が「浄土」誌上に創刊以來擔當してゐる「信仰相談」は各方面に非常な好評を博してをります。それは問ふ者は切實な信仰上の悩みや疑ひをぶちまけ、答へる者はそれを親身になつて懇切に指導してゐるからです。今こゝにその「信仰相談」中の主なものの約二百を選び系統的に配例して一冊の書物としました。故にこれは懇切な信仰の案内書であり、最も平易に書かれた佛教讀本であり佛教辭典でもあります。著者の公正な立場は浄土宗たると他宗たるを問はず、信仰を求め、教義を探らうとする人たちを首肯せしめるでせう。

最寄の書店へ御申込置き下さい。附近に書店のない方は直接本會宛送料をそへて御申込下さい。

浄土 第十卷 第一號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）  
昭和十八年十二月廿日印刷納本・昭和十九年一月一日發行

（停）定價金十二錢（送料）  
外埠定價金十三錢

東京芝區芝公園明照會館  
東京芝區芝公園明照會館  
東京芝區芝公園明照會館

發行所 法然上人鑽仰會